

小学校知的障害特別支援学級における保護者支援に関する一考察 ～ライフヒストリー分析に基づく研修プログラムの開発～

八 代 史 子

帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース

キーワード：保護者の悩み、知的障害特別支援学級、ライフヒストリー

I 問題意識と目的

近年の知的障害特別支援学級に在籍する児童の増加と多様化は、同時に保護者の増加と多様化でもあり、子供の重要な支援者・理解者として保護者一人一人とより良い関係を築いていくことが、ますます求められている。そのためには、保護者の願いや要求の背景にあるものを、教師がより深く理解すること、または理解しようとするのが重要であると考えられる。

そこで、小学校知的障害特別支援学級に在籍する子供の保護者が、我が子の成長過程でどのようなことに悩んできたか、そして保護者を支援する立場の教師はどのような役割を果たしていたのかを、保護者の語りによって明らかにしたい。

そのような問題意識に基づき、次の2点を研究の目的とした。

- (1) 学童期を中心に、知的障害特別支援学級の保護者が子供の成長過程でどのようなことに悩み、教師に対してどのような支援を求めてきたのかをライフヒストリーの手法を用いて明らかにする。
- (2) (1) によって明らかになった、学童期での保護者の悩みの変容と教師の支援とのかかわりを基に、知的障害特別支援学級を中心とする若手教員を対象とした保護者理解と支援に関する校内研修会を実施し、その効果を検証する。

II 先行研究より

障害児の保護者については、主に1980年代以降我が国でも様々な量的及び質的研究がなされてきているが、知的障害特別支援学級の保護者の抱える悩みとそれを支援する教師の役割を、保護者の語りから研究しているものは少ない。

そして語りの分析の方法として、ライフヒストリー法を用いる。ライフヒストリーの理論や手法の解釈は多様であるが、本研究においては、山田(1997)の「ライフ・ヒストリーとは、ある特定の個人によって語られた、あるいは書かれた資料、すなわちインタビューや自伝、日記などに焦点を当て、それらに対する多角的な検討を行

うことにより個人の経験や生涯を再構成しようとする手法」¹⁾と定義する。

III ライフヒストリーによる 保護者の語りの分析

1 調査対象

知的障害特別支援学級に在籍またはかつて在籍していた子供の保護者4名。選定にあたっては、主に特別支援学級在籍中の悩みの変遷に焦点を当てるため、就学支援委員会で特別支援学級への就学がふさわしいとの判定があり、1年生から特別支援学級に在籍した子供の保護者を選んだ。更に、小学校での保護者支援の卒業後へのつながりやその意味についての視点で語れること、特定の担任やエピソードへの偏りを防ぐことをねらい、卒業生の保護者も対象とした。

2 データの収集

1人につき2回、合計1時間半程度の半構造化インタビューによる。更に調査協力者の語りを裏付けるために、当時の連絡帳、関係者へのインタビュー等を収集し、分析に用いた。

3 倫理的配慮

調査協力者に対して研究の目的及び方法について事前に説明した上で、個人が特定できないように記録、分析、発表を行うことを伝え、同意を得ている。

4 分析の方法

- (1) インタビューの内容を逐語記録に起こした。
- (2) 4人の語りを時系列で編集した上でそれぞれの全体像を把握した。
- (3) (2)のデータをセンテンスごとにコード付与した。
- (4) 付与したコードから4人の共通性や話題の集中しているものをまとめた。その結果、いくつかのキーワードが生成された。
- (5) 保護者の心情と子供の成長、教師の姿に焦点を当て(4)のキーワードと関連させながら概念化を図った。

5 分析結果

上述の方法により、9つの小カテゴリーが生成され、その内7つは2つの大カテゴリーにまとめることがで

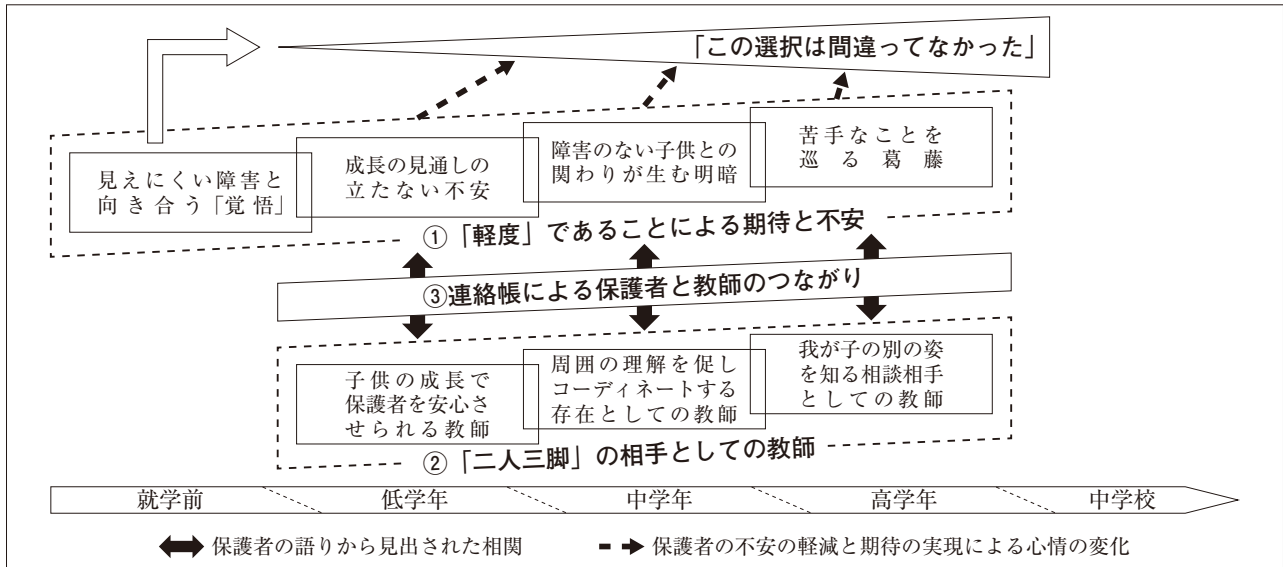


図1 分析結果図

き、全体として3つの大カテゴリーとなった。それを結果図に表したものが図1である。この結果図を基に、以下のストーリーラインを導いた。

小学校知的障害特別支援学級に在籍する軽度知的障害児の保護者は、集団の中での障害の分かりにくさを経験しながら、就学前の段階で徐々に【見えにくい障害と向き合う「覚悟」】を決めていく。特別支援学級入学後も【成長の見通しの立たない不安】は続いていくが【子供の成長で保護者を安心させられる教師】によって、我が子の成長を喜んだり特別支援学級のよさを実感したりする。徐々に学校生活に慣れ始めると、交流学級や学童などで【障害のない子供との関わりが生む明暗】が生まれる。そこでは、子供を取り巻く環境に対して【周囲の理解を促しコーディネートする存在としての教師】により、保護者は安心感をもつ。進学を意識するようになると、我が子への理解が進み、苦手なことを更に頑張らせるかどうか【苦手なことを巡る葛藤】が生じる。それに対して【我が子の別の姿を知る相談相手としての教師】のかかわりにより、我が子の捉えに気づきや変化が生まれる。

《①「軽度」であることの期待と不安》を抱えた保護者に対し《②「二人三脚」の相手としての教師》が6年間を通して支援していくことで、保護者は、特別支援学級を選んだことに対して【「この選択は間違っていない」】と思えるようになる。その過程において《③連絡帳による保護者と教師のつながり》は、重要な役割を果たしている。

Ⅳ 研修プログラムによる還元

研修は、目的に迫るために①教員が相互に学びあ

場、②保護者対応を学ぶ場、③知的障害特別支援学級への理解を深める場、の視点を基に開発した。

○研修プログラムの構成

研修テーマ「連絡帳の行間を読む」

- 1 研修のねらい
- 2 小グループによる演習
- 3 ミニ講義
- 4 演習の振り返り

V まとめ

保護者にとって、我が子を受容することは、障害児の親である「私」を受容することにつながっており、そこに至る過程で教師は重要な役割を担っていた。個人の生活構造の中で、当事者の主観とその人を取り巻く客観の関係を、長いタイム・スパンで把握しようとするライフ・ヒストリー法によってこれを見出したことが重要であった。

一方結果の活用にあたっては、限定された調査協力者の語りの共通性を見出す研究であることの限界もある。

研修においては、連絡帳の役割に焦点化したことが若手教員のニーズに合致するものであり、保護者理解と支援という点での意識喚起につながった。特別支援学級への理解という点では、通常の学級の若手教員のニーズを把握しながら、特別支援教育や知的障害への理解を、校内で計画的且つ日常的に深めていくようにしたい。

- 1) 山田浩之1997「英米におけるライフ・ヒストリー研究の系譜—社会学、教育社会学を中心に—」, 松山大学論集第9巻第5号